

展示室1 イギリス美術の流れ



サー・フランク・ブランギン
《エリザベス女王の乗船を待つ
ゴールデン・ハインド号》

イギリス近代美術は、当館コレクションの大きな特徴のひとつです。18から19世紀には、油彩による肖像画や風景画とともに、イギリスで特に発展した水彩画が盛んに描かれました。肖像画ではイギリス貴族の華やかな衣装と優雅なまなざし、油彩や水彩による風景画では、鋭い観察眼と確かな画面構成による豊かな自然表現が楽しめます。また、19世紀後半から20世紀初頭に活躍した、日本とも関わりのある画家の作品を展示します。

当館では平成29、30年度の休館期間を中心に、展示機会の多い作品の修復作業を行いました。作品の状態を調査し、極力劣化を避けて美しいまま後世に伝えることは美術館の大切な使命です。今回は修復の成果とその過程の調査で判明したことの一部をご紹介します。

作者名	作品名	制作年	技法・材質	
アレクサンダー・カズンズ	川岸に神殿のある風景		水彩・紙	
ジョン・ロバート・カズンズ	サヴォワ地方、サランシュ附近のアルプス渓谷		水彩・紙	
ポール・サンドビー	ウォーリック城シーザー塔	1778-82	水彩、インク・紙	
ジョン・ラスキン	オーヴェルニュの丘		鉛筆、ホワイトボディカラー・紙	
ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー	コニストンの荒地	1797頃	水彩、鉛筆・紙	
ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー	メッドウェイ川沿いのロチェスター	1826	メゾチント・紙	
ジョン・コンスタブル	テダムの谷	1802	油彩・紙、キャンバス	
サー・ジョシュア・レイノルズ	エグリントン伯爵夫人、ジェーンの肖像	1777	油彩・キャンバス	
サー・エドワード・コーリー・バーン＝ジョーンズ	フローラ	1868-84	油彩・キャンバス	
ウィリアム・ホガース	サミュエル・マーティンの肖像	1758-60頃	油彩・キャンバス	
ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー	カンバーランド州のコールダー・ブリッジ	1810	油彩・キャンバス	
トマス・ゲインズボロ	オース夫人の肖像	1767	油彩・キャンバス	
アルバート・ジョゼフ・ムーア	黄色いマーガレット	1881	油彩・キャンバス	
サー・フランク・ブランギン	エリザベス女王の乗船を待つゴールデン・ハインド号	1903-5頃	油彩・キャンバス	畑中俊彦氏寄贈
チャールズ・ワグマン	西洋紳士スケッチの図	1870代	油彩・スケッチボード	
サー・アルフレッド・イースト	スウェル川のほとり		油彩・キャンバス	佐藤克也氏寄贈
ジョン・ヴァーレー・ジュニア	日光の茶屋	1890	油彩・板	

展示室2 近代洋画の金字塔



五姓田義松《婦人像》

狩野派や漢画に学び洋風画家へ転向した司馬江漢は、西洋の技術を日本にもたらず先駆けとなった一人です。日本の本格的な油彩画は、幕末明治に来日したイギリス人画家ワグマンに学んだ高橋由一、五姓田義松らによって黎明期を迎えます。そしてイタリア人画家フォンタネージに師事した浅井忠、フランス留学から帰国した黒田清輝らは東京美術学校（現在の東京藝術大学）で教鞭を執り後進の育成に励みました。東京美術学校の画家とは対照的に、三宅克己、吉田博、中川八郎らは独力で米欧に渡り、当地の展覧会で大成功を収めています。大下藤次郎は『みづゑ』を創刊し、水彩画の普及に貢献しました。さらに大正から昭和期に画壇を牽引した名立たる画家、またバステル、テンペラで功績を挙げた画家をご紹介します。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
司馬江漢	飛鳥山図	寛政後期	油彩・絹
高橋由一	風景（鳥海山）	1880代	油彩・キャンバス
五姓田義松	婦人像	1871（明治4）頃	油彩・キャンバス
浅井 忠	収穫	1893（明治26）頃	油彩・紙、板

作者名	作品名	制作年	技法・材質
和田英作	上総風景	1897 (明治 30)	油彩・キャンバス
黒田清輝	東久世伯肖像エスキース	1894 (明治 27)	油彩・キャンバス
岸田劉生	照子像	1920 (大正 9)	水彩・紙
小出櫓重	自画像	1918 (大正 7)	油彩・キャンバス
中村 彝	朝顔	1923 (大正 12)	油彩・キャンバス
藤島武二	「耕到天」習作	1936 (昭和 11)	油彩・キャンバス
梅原龍三郎	静物		油彩・キャンバス
安井曾太郎	初秋の北京	1944 (昭和 19)	油彩・キャンバス
古賀春江	蝸牛のいる田舎	1928 (昭和 3)	油彩・キャンバス
北川民次	アメリカ婦人とメキシコ女	1935 (昭和 10)	テンペラ・板
武内鶴之助	庭		パステル・紙
矢崎千代二	モンマルトル	1921-26 (大正 10-15)	パステル・紙
大下藤次郎	晩秋	1908 (明治 41)	水彩・紙
三宅克己	ブルージュ	1910 (明治 43)	水彩・紙
石川欽一郎	牛荘 (Newchwang)		水彩・紙
中川八郎	秋の河辺		水彩・紙
鹿子木孟郎	水車小屋		水彩・紙
吉田 博	滞船、薄暮	1907 (明治 40) 頃	水彩・紙

展示室3 戦後の美術潮流と郡山



三坂耿一郎
《まとう》

郡山市は、戦後の美術において目覚ましい展開を見せました。

1946 (昭和 21) 年に安藤重春らが開催した「郡山美術展覧会」は、戦後開催された地方の公募展としてはかなり早い例でした。1948 (昭和 23) 年に鎌田正蔵、佐藤昭一らによって結成された福島県新美術連盟は、後に「新作家グループ」となって、福島県の前衛美術をリードする団体になります。1950 (昭和 25) 年に県南美術協会が結成されると郡山周辺の美術はより活況を呈し、その翌年には地方で最初の「平和のための美術展」が郡山市公会堂で開催され、全国から注目を集めました。

今回はこのように先鋭的な活動を行った戦後の郡山市ゆかりの作家たちを紹介します。

作者名	作品名	制作年	技法・材質	
青津清喜	窓際	1950 (昭和 25)	油彩・キャンバス	
水田荘介	青衣の女	1964 (昭和 39)	油彩・キャンバス	
芳賀忠行	虚構の風景—城	1974 (昭和 49)	油彩・キャンバス	
鎌田正蔵	飢える人	1952 (昭和 27)	油彩・キャンバス	鎌田正蔵氏寄贈
佐藤昭一	食事	1952 (昭和 27)	油彩・板	佐藤昭一氏寄贈
佐藤昭一	シリーズ人間—Sさんのトマト—	1979 (昭和 54) 頃	油彩、アクリル・キャンバス	佐藤昭一氏寄贈
佐藤潤四郎	竹に雀文ワイングラス		ガラス/宙吹・グラヴェール、プランツ	佐藤久枝氏寄贈
佐藤潤四郎	奈良・薬師寺西塔舍利小容器 (試作)		ガラス/宙吹・プランツ	
佐藤潤四郎	オブジェ・ガラスを吹く人 (2点組)		金工 (鍛鉄)	大方竜子氏寄贈
安部直人	Anonymous I	1995 (平成 7)	エッチング、メゾチント・紙	
岩谷 徹	能シリーズ 15—水	1990 (平成 2)	メゾチント・紙	
土橋 醇	星雲	1963 (昭和 38)	油彩・キャンバス	
黒沢吉蔵	大和箸中	1980 (昭和 55)	岩絵具・紙	
安藤重春	雨の華	1979 (昭和 54)	岩絵具・紙	
三坂耿一郎	まとう	1967 (昭和 42)	ブロンズ	
佐藤静司	街の詩	2006 (平成 18)	木	佐藤静司氏寄贈
折笠兆春	黄雲	1995 (平成 7)	乾漆	折笠兆春氏寄贈

展示室 4 明治以降の版画



亀井至一
《美人》

西洋からもたらされた銅版画は、江戸時代に地図や解剖図など実用的な面で発達し、明治期になると、紙幣や証紙にも使われるようになりました。

木版画は、江戸時代に浮世絵として人気を博しましたが、明治期になると石版画の台頭で廃れていきます。やがて明治末には自画自刻自摺の創作版画が生まれました。すると、大正期にはそれに対抗するかのようになり、絵師・彫師・摺師の三者による浮世絵の伝統を復活させようとする新版画も制作されるようになりました。

今回は、明治時代の銅版画と石版画、そして大正時代以降の新版画と、様々な技法による創作版画をそれぞれ見ていきましょう。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
●明治の版画：銅版画と石版画			
亜欧堂田善	『新鑄総界全図 付・日本辺界略図』	1809 (文化 6)	銅版・紙／卷子
青野桑州	『布列私解剖図 完』(中欽哉訳、青野桑州銭毫、思々齋蔵版)	1872 (明治 5)	エッチング・紙／本
松田緑山 (二代目玄々堂)	「大日本政府 舊公債証書」金参百圓	1872 (明治 5)	エングレーヴィング・紙
松田緑山 (二代目玄々堂)、梅村翠山他	一銭印紙	1872-74 (明治 5-7)	エングレーヴィング・紙
エドアルド・キヨソネ	日本銀行兌換銀券 壹圓	1888 (明治 21)	エングレーヴィング・紙
エドアルド・キヨソネ	大日本帝國政府 地券	1875 (明治 8)	エングレーヴィング・紙
亀井至一	東京下谷芸妓小幾	1883 (明治 16)	石版、手彩色・紙
亀井至一	芸妓之図	1882 (明治 15)	石版、手彩色・紙
亀井至一	美人	1894 (明治 27)	石版・紙 秋本倫子氏寄贈
	『時事新報』明治 27 年 9 月 5 日第 4066 号付録		
結城正明	ヒポクラテス像 (L. マッサード原画による)	1877 (明治 10)	エングレーヴィング・紙／軸
エドアルド・キヨソネ	岩倉具視公肖像	1889 (明治 22)	エングレーヴィング・紙
●新版画			
吉田 博	せと奈いかい高浜港	1928 (昭和 3)	木版・紙
石川寅治	琉球の市場		木版・紙
石川寅治、中川八郎、中沢弘光、安田稔	『新領土みやげ』(金尾文淵堂刊)	1917 (大正 6)	木版・紙／ポートフォリオ
安井曾太郎	画家とモデル、椅子に凭れる女、レコードを聴く人 『安井曾太郎版画集』(石原求龍堂刊)	1932-34 (昭和 7-9)	木版・紙／ポートフォリオ
●創作版画			
恩地孝四郎	Lyrique No.2 楽曲によせる抒情 ラヴェル“道化師の朝歌”	1933 (昭和 8)	木版・紙
谷中安規	鍵 (詩画集の 8)	1933 (昭和 8)	木版・紙
斎藤 清	漁村の女 (北海道) (『日本女俗選』より)	1946 (昭和 21)	木版・紙
福田利秋	漁網修理 (1) - (3)	1978 (昭和 53)	木版・紙 福田利秋氏寄贈
岩越二郎	おぼぼこ 『HANGA 第四輯』(版画の家刊、木版・紙／ポートフォリオ) 表紙	1924 (大正 13)	木版・紙
岩越二郎	向日葵 『HANGA 第八輯』(版画の家刊、木版・紙／ポートフォリオ)	1925 (大正 14)	ボール版・紙
岩越二郎	年賀状 『版芸術 第九号 年賀状百人集』(白と黒社刊、木版・紙／本)	1932 (昭和 7)	木版・紙

展示室 4 ドレッサーの芸術 東西の美



クリストファー・ドレッサー
《トースト・ラック (青海波)》

クリストファー・ドレッサー (1834 - 1904) は、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、イギリスを中心にモダン・デザインの先駆けとなる重要な仕事を残したデザイナーです。

明治 9 (1876) 年、ドレッサーは、イギリスから日本へ寄贈される美術工芸品約 300 点を携えて来日しました。4 ヶ月にわたる日本滞在中、彼は様々な美術工芸品の生産地を訪れ、当時の日本の殖産興業政策にも貢献しました。帰国後は、日本の建築や美術工芸品について本にまとめてヨーロッパに紹介し、さらにそれを自身のデザインにも昇華させたのです。

西洋の伝統的な装飾の概念にとらわれることなく、日本をはじめ外国の工芸品研究から得た自由な発想によって、ドレッサーは独創的で洗練されたデザインの数々を生み出しました。

作者名	作品名	制作年	技法・材質
クリストファー・ドレッサー	トースト・ラック (ポイントアーチ型)	1881	金属、電気メッキ
クリストファー・ドレッサー	トースト・ラック (青海波)		金属、電気メッキ
クリストファー・ドレッサー	クラレット・ジャグ (ぶどう酒用容器)		ガラス、金属、電気メッキ
クリストファー・ドレッサー	スプーン・ウォーマー		金属、電気メッキ
クリストファー・ドレッサー	デカンター・セット (栓付き細首ぶどう酒瓶)		ガラス、金属金具、電気メッキ
クリストファー・ドレッサー	柳編み把手付きダブル・バスケット	1881	金属、電気メッキ
クリストファー・ドレッサー	日本風把手付き薬味入れ		ガラス、金属、電気メッキ
クリストファー・ドレッサー	日本風把手付き薬味入れ		ガラス、金属、電気メッキ
クリストファー・ドレッサー	瓶 (茶色クルーサ・ガラス)		ガラス
クリストファー・ドレッサー	花瓶 (緑色クルーサ・ガラス)		ガラス
クリストファー・ドレッサー	プロペラ瓶 (緑色クルーサ・ガラス)		ガラス
クリストファー・ドレッサー	花瓶 (赤色クルーサ・ガラス)		ガラス
クリストファー・ドレッサー	ローマン瓶 (緑色クルーサ・ガラス)		ガラス
クリストファー・ドレッサー	染付鳥波濤文把手付鉢		磁器
クリストファー・ドレッサー	緑釉人物文扁壺	1879-82 頃	陶器
クリストファー・ドレッサー	緑釉龍波濤文水差	1879-82 頃	陶器
クリストファー・ドレッサー	色絵椿文龍花瓶 (一対)	1886	陶器
クリストファー・ドレッサー	ナイフとフォークのセット		金属、電気メッキ
クリストファー・ドレッサー	色絵花模様大皿	1886	陶器
クリストファー・ドレッサー	草花象嵌模様足付皿		銀、銅、真鍮
クリストファー・ドレッサー	孔雀象嵌模様円形皿		銀、銅、真鍮
クリストファー・ドレッサー	色絵金彩竹梅文水差		磁器
クリストファー・ドレッサー	色絵蝶花模様瓢箪形壺	1892-95 頃	陶器
クリストファー・ドレッサー	橋型二重注口人面壺	1879-82 頃	陶器
クリストファー・ドレッサー	彩釉和風花瓶	1879-82 頃	陶器
クリストファー・ドレッサー	色絵花模様皿とボウルのセット	1886	陶器
クリストファー・ドレッサー	色絵花模様隅切角皿	1886	陶器
クリストファー・ドレッサー	色絵草花文隅切角皿	1886	陶器
【資料】クリストファー・ドレッサー著	『日本—その建築、美術、工芸』	1882	本

ロビー展示 彫刻・他

作者名	作品名	制作年	技法・材質
● 1 階			
笠置季男	躍進	1958 (昭和 33)	セメント
アントニー・ゴームリー	量子雲 XXIII	2000	ステンレス・スチール棒
アントニー・ゴームリー	領域 XIII	2000	ステンレス・スチール棒
● 2 階展示ロビー			
木内 克	露柱	1976 (昭和 51)	テラコッタ
西 常雄	藤原義江像	1971 (昭和 46)	ブロンズ
柳原義達	黒人の女	1956 (昭和 31)	ブロンズ
高田博厚	アラン像	1932 (昭和 7)	ブロンズ
● 前庭			
バリー・フラナガン	野兎と鐘	1988	ブロンズ